

巻頭言

川の流れと共存する地域づくり

財団法人東北開発研究センター 参与 渡辺良平



東北を語るときに最初に口をついて出る言葉が「自然」である。自然が東北の宝であることに間違いはないが、同時に自然は全国に満遍なく存在していることも考慮に入れておく必要がある。北海道から九州・沖縄にいたるまで郷土自慢を尋ねたら、まず九割以上の都道府県から「豊かな自然」の答えが返ってくるだろう。

したがって、東北の自然を全国にアピールしようとするならば、その独自性を明らかにすること、すなわち他の地域と差別化できる自然について納得できる説明が用意されなければならない。

東北の自然として誇れるのが、落葉広葉樹林帯特有の四季の変化、ブナやコナラが見せる春の若葉と秋の紅葉の美しさであることはいうまでもない。また冬山の枯木立を背景にした雪景色も山水画の趣を湛^{たた}えて感動的である。森林がもたらす有用財も多い。しかし、森林の豊かさだけでアピールするのは、まだまだ東北の自然を十分に語りつくすことにならないように思う。

そこで、森林とともに東北の自然資源として特筆したいのが川の流れである。東北には逐一固有名詞をあげなくとも誰もが知っている大河川が各県にあり、流域面積の広さでいえば、上位十五位までに八つの河川が入っている（含む新潟県）。ちなみに最上川は流域面積でこそ第九位になるが、年平均流量では五本の指に入る豊かな川である。

川が人類の文化を育てた母体であるなどと大げさなことをいうつもりはない。豊かな水の流れが人々にやすらぎやゆとりの心情を与え、その心情が日本人の求めるライフスタイルの基礎にあることを考えれば、川の流れが今後の地域づくりにかなり重要な役割を占め

てくることだけを言えば十分である。東北の大河川は単に観光や環境保全上の資源として期待されるだけでなく、人々の望むライフスタイルを導く上での象徴としての意味づけを帯びてこよう。

東北の河川についてはもう一つ注目すべき点がある。試みに日本地図を広げて東北の大河川と西日本の河川の流れの方向を見比べながら、それに日本列島の幹線交通体系を重ねあわせていただきたい。いうまでもなく、幹線交通体系は西日本では東西を、東日本では南北を基軸として走っている。そこで気づくのが、西日本では幹線交通体系が河川を分断する方向で走っているが、東北では大河川と平行して走っていることである。この事実は自然と人間の関わりを考^かえる上で重要な意味をもってくる。なぜなら、東北では河川という自然の流れで媒介される生活文化の連鎖と、近代文明の所産である産業文化の連鎖が同じ方向をとるために、両者の機能を結合した連携軸が構想しやすいからである。生活と産業の調和が二十一世紀社会像として望まれていることは言わずもがなである。

私たちは、経済成長のためにあまりにもスピードにこだわり過ぎ、緩やかな流れに乗って物事を考える方法を忘れてしまったし、またその余裕を失ってしまったが、東北の大河川と幹線交通路、生活圏の配置を地図の上で落としてみると、ここには川の流れを人々の思考回路の中に取り組む知恵が自ずから育つ仕組みがあって、東北が生活と産業を融合した次の時代の文明を先導する姿がほの見えてくる。

自然と歴史に富む最上川の流れを基軸とした地域文化の創造が豊かな山形県をつくり、東北各県がそれぞれの川の流れを生かすことで競いあい、その活動が豊かな東北をつくることを期待している。